
悪になりたがりの再生者

Soul Pride

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪になりたがりの再生者

【Nコード】

N3259BA

【作者名】

Soul Pride

【あらすじ】

連続殺人鬼によって家族を失った少年、加添十四の突然の失踪。そこから物語は始まった。

魔法という物に関わり、劇的に生活は変わった。寂しさは埋められ、空白は、欠落はなにもなかった。楽しかった。嬉しかった。心地よいものであった。

しかし一方で十四は、心の中にある空白がないことに絶望した。求める物がない。それは、生きる活力がないと同じではないのかと。我慢ならなかった。疼いた。渴いた。飢えた。欲望が欲しいと、十

四は新しく手にした日常から決別するため、姿を消した……！
失踪した十四を追うべく、魔法少女たちは空を飛ぶ。

■○■ ISとは違って短い話を連続的に出してみるテスト的なものです。よって更新頻度はこっちの方が多くなるとは思います。内容に関しては短いと思います。よろしく、おねがいします。

起源は慟哭、失踪

高町なのは、十歳。私立聖祥大学付属小学校五年生の彼女は走っていた。

息を切らし、学校帰りのままであることを制服と背負った鞆が示している。

走るのは得意ではない。運動神経は、なのはあまり高い方ではない。むしろ苦手な分野である。

荒い呼吸を繰り返し、全速力で疾走する。ペース配分なんて最初から考えていない。勢いを落とさず、速度を落とさず、さらに加速をしようとしている。

呼吸が辛い。脇腹に鈍い痛みが走りっぱなしで、足を動かすのが苦痛だ。

それでもなのは足を止めない。走り続けて走り続けて、足が壊れるまで加速を止めない。

躓いて転げる寸前になっても、コンクリートの地面に手をついてすぐさま体勢を整える。てのひらが擦りむけても、なのははまるで気にしない。

急ぐ。急ぐ。

いくら自分が辛かろうと関係ない。いくら自分が苦しかろうと問題ない。

痛みは我慢できる。苦しみは歯を食いしばれば誤魔化せる。しかし彼女は我慢できない苦痛があった。

高町なのはは、自分の苦痛よりなによりも、他者の苦痛がなによりも苦痛と感じ、我慢することができないのだ……。

「お母さん！」

ぜー、ぜー、と肩と背中を揺らし、息を絶やしながらなのはは駅前に店を構える喫茶翠屋へと飛び込む。

高町家が経営するこの喫茶店は、彼女の父がオーナー、母がパティシエをしている。海鳴市でも有名所の一つに入る名店であり、なのは自身もそんな両親を尊敬している。

「どうしたの、なのは。そんなに慌てて……」

「……が、いない、の……」

厨房から、なのはの母、高町桃子が呼ばれて出てくる。娘のいつもの違う様子に、驚いた様子だ。

全速力で走ってきて声が枯れてうまく出すことができない。後先考えずに走ってきたツケが回ってきた。

桃子は一旦厨房へと戻り、コップに水を一杯くんでそれをなのはに渡す。ひとまず落ち着かせなければ話を聞くことができない。

なのははそれを受け取って、一気に中身の水を飲み干す。

落ち着いたのか、呼吸も落ち着き、少しだけ冷静さを取り戻した。

「それで、どうしたの？落ち着いて話してみて」

「いなくなったの！あの子が、あの子が……！」

それでもなのはの顔は真っ青で。今にも目に溜めこんだ涙が零れ落ちそう。体の震えが止まらなくて。

自分のせいだ。自分のせいだ。自責の念が、延々と責め続け、彼女の不屈の心が折れかねないほどである。

心に背負ってしまった罪の意識は、彼女の小さい体を容赦なく押し潰そうとしていた。

「——十四くんが、いなくなっちゃったのっ！」

とある少年の失踪、そして少女の慟哭から、物語の引き金は引かれた。

亡失、資質の覚醒

加添かぞえ十四は十一歳、小学五年生のどこにでもいる男子だった。

空手を習い、サッカー少年団に所属し、塾通いに追われる、ただの小学生であった。

……過去形となってしまうたのは、現在の時間軸から一ヶ月の時を遡った先に原因がある。

端的に言ってしまうえば、加添家は皆殺しにされた。加添家惨殺事件。メディアで大きく取り上げられ、連日お茶の間をにぎわせ、恐れさせた。

その唯一の生き残りが十四であった。殺人鬼から運よく生き延びた男の子。世間の同情の視線に彼はさらされた。

ここで話を終わらせてしまえば、平々凡々ありふれたとは言えないがただの事件の一つとして数えられていた。次第に人々の記憶から薄れていき、そして忘れ去っていく。その程度のことではしかない。

しかし、話はそれで終わらせていけない。終わらせてはいけない。本当の要点は、ここからである。

加害者である犯人が、管理世界——魔法使たちの世界からやってきた連続殺人鬼であった。その殺人鬼も、魔法使い——魔導師であった。

その殺人鬼は管理外世界の住人を集中的に狙い、家族単位から村単位で皆殺しにする。警察組織であり司法組織である管理局から全次元世界へと指名手配された、特S級の札付きの犯罪者であった。

魔導師と魔法を使えない一般人との力の差は絶望的と言ってもいい。単騎のエース級魔導師は一国の戦力と比肩することだっている。

さらにその殺人鬼は魔法の腕も冴え、転移魔法の達人。ショートジャ短距離移動シラから次元跳躍まで使いこなし、管理局の手から逃れ続け、殺人をし続けてきた。

そして第97管理外世界、地球の日本の、加添家に殺人鬼は標的を定めた。

その日、日曜日であった。雨の日であった。仕事で忙しい父親も、家事に追われる母親も、部活動に熱心な兄も、偶然が重なったように休みが重なり、その日サッカー少年団の練習試合があった十四もあいにくの雨で注視となり、退屈にしていた。

——どこか食べに行くか。

父からの提案。それを歓迎する母。そして、どこに行こうかと兄。

——どこに行きたい？

父は息子たちに何を食べたいと聞いた。

どうする、何が良い？と兄は、十四に決定権を譲った。

十四はふと、赤身のマグロが食べたいと思った。

——寿司。回転寿司がいい。

よしきた、と父は車のキーと財布を用意し、母は化粧をし、兄弟はいまかいまかと待った。

支度が終わり、外へ出ようと家族全員が玄関へと向ったその時――

——惨劇は、起きた。

十四が自我を取り戻した時には全てが終わっていた。

体にはいくつもの裂傷。骨折。座り込んだまま動くこともできず、全身から走る激痛が激痛でなくなつて麻痺となり、吐き気を催すほどに苦痛であつた。

目がかすみ、気だるさに満ちている。どうしようもなく、体が重い。

いつもより、視界が狭い。左目は潰れていた。

なにも、音が聞こえない。鼓膜は破れていた。

それでも、十四は生きながらえていた。

何が起こきたと混乱したが、白くかすんだ見まわそうとする。

そして、すぐにわかり……思い出した。

見慣れたはずの自分の家。それが今までにみたこともないくらいに荒らされていた。

家具類は倒れているのは当たり前。壁に穴は空き、床はめくれ、壊れた家電からは火花は散り、天井は空をのぞかせていた。

そして、ほとんど感覚のない両手に持っていたモノ——それは……。

この惨劇を引き起こした男の首級と、両親と兄の命を絶った真っ赤に血塗られた殺人鬼のナイフだった。

——ああ、そういうことなのか。

まるで他人事のように、冷静に、起きたこと、起こしたことを次々と思い出していた。

それを頭が受け入れた時には、瞼を開いていることすら限界になり、疲れが誘う眠気に素直に従つて少しずつ目を閉じていった。

——最後に覚えていた記憶は、白いロングスカートの少女の姿であつた。

加添家惨殺事件の三日後に、加添十四は時空管理局本局の集中治療室^{CU}にて意識を取り戻した。

酸素マスクをし、点滴と輸血の針を刺され、全身を包帯で巻かれていた。

記憶の混乱はなかった。

家族が殺されたこと。家族を殺した男を自分が殺したこと。全てを受け入れていた。

不思議と、悲しみは沸いてこなかった。悲観に暮れ、絶望に満ち、泣き叫ぶようなことはなかった。ただ、事実をありのまま受け入れていた。

今自分がすべきことを己の体の回復と考え、また目を閉じて眠りにつく。

……………このとき、十四自身は己の体に起きていた異変に、気付くことはなかった。

無力、届かぬ者の哀

高町なのはは、強い罪悪感に苛まれていた。

——私のせいだ、私のせいだ、私のせいで、あの子を助けられなかった……。

自分が遅かったから。自分がやってくるのが遅れたから、加添家を助けることができなかった。加添十四に大怪我をさせ、人を殺めさせてしまった。

自分の持つ魔法の力は、誰かを助ける力。泣いている子の涙を、止めるための力……そうではなかったのか。

何が魔法だ。こんな力を持っていても、救えなければ何にもならない。なのはは、自分がどこにでもいる無力なただの少女であることを知った。

魔法という特別な力を使っても、結局は十年ちょっとしか生きていない女の子。多くを求めるには彼女には酷過ぎた。

それは彼女の関係者はよく知っている。関係者でなくとも、彼女を知ればそう思う。しかし彼女自身は、誰よりも自分に厳しすぎた。誰よりも他者に優しすぎた。

うちしかれる無力感。容赦なく責め立てる、自分が弱かったからあんな結果になったという現実。

事件現場を見て、口を手で押しても胃の中から湧き出てくる物を残らず吐き出し、無力感という剣を突き立てさせるには幼すぎた。しょうがない、の一言で済ませられるほど、あの光景は忘れられるものではない。否、忘れてはならないものだ。

……あれは、己の罪の証なのだから。

高町なのはの心は、折れる寸前にまできていた。高温に熱されたアルミの針金のように、ポツキリ容易く折れ曲がってしまうくらいに。

ただ、いつまでも折れているままでもいられない。いつまでも泣いているわけにもいかない。

涙は流した。思う存分後悔した。だったら、そこから何をすべきか。

——高町なのはは、いつだって、どこだって、転んだらすぐ立ち上がっていた。

あまりにも強すぎて、あまりにも不屈すぎて、あまりにも……儂すぎた。

涙を拭き、双眸を見開き、また前に進むしかない。

高町なのはは、そうすることしかできない。

加添家惨殺事件の翌日、早々にショックから立ち直った彼女は、生き残った少年——加添十四について調べ上げた。

知らなければならなかった。知りたいと思った。知って、彼に謝らなければならなかった。

願わくば、彼に許してほしかった。

許されなくとも、自分を罵倒し、貶し、軽蔑してくれてもいい。それで気が済んでくれるなら、喜んでそうするつもりだった。

加添十四。集中治療室で見た全身包帯まみれの姿ではない素顔の写真は端正な顔立ちで、硬い表情であった。

歳は十一歳でなのはと同じ学年の小学五年生。同い年に当たる。

生年月日は四月三十日。血液型はAB。

市内の市立小学校に通い、同じ町内の空手道場に通い、サッカー少年団にも所属し、塾にも通っていた。一週間の予定は全て習い事で埋まっていたという。

学校の成績は良く、学年でも上位に食い込み、運動神経に至っては学年で随一を誇っているという。サッカー少年団では五年生ながら六年生に混じってもレギュラーポジションを持ち、エースプレイヤーとして活躍。空手でも茶帯で、初段である黒帯を取得できる年齢になればすぐさま取れるという評価であった。

友人の数は多いが、独りでいることを好んでいたという。

独りでいることを好んだ、と資料にはあるがなのはには彼の目に寂しさを感じさせなかった。

独りでいる寂しさには一際敏感であるのはには、十四には孤独の辛さは伺えなかった。

たとえば独りであっても、その実周りには友人が多かったからこそ、孤独の辛さはない。

……しかし、今まではそうだったかもしれないが、これからは違う。

彼は家族を失った。本物の孤独を知ることになるだろう。

自分が彼を孤独へとおいやってしまった。

ならば、その孤独を埋めるのが自分の役目である。それが償いとなる。

友達でいい。名前を呼び合うような、そういう関係で。

憎悪の対象でいい。心無い言葉を向けられても、それでいい。

高町なのはは、そう誓った。

加添十四の眠る集中治療室に、彼を見守る者たちがいた。

「……意識を一度取り戻してから、全身に魔力を巡らせて回復効率

を上げている？」

「はい。リンカーコアを起点に、血管と神経に魔力を巡らせて、細胞の分裂数を上げて治癒を行っているようですが……おそらく、彼は無意識でやっていると思います」

その人物は、時空管理局本局次元航行艦アースラの艦長リンディ・ハラオウンと、十四の担当医務官を務めるシャマルであった。

シャマルの書き込んだカルテを見たリンディは、やはり十四には魔導師の資質を示すリンカーコアを持っていることを確信した。それも、強力な魔導の才能を秘めていることを。

管理局が幾度も手を焼いたあの殺人鬼を手にかけた。恐らく、危機的状况に置かれたことで防衛本能が眠っていた魔導の才能を起こした、というのがリンディの推測であった。

目覚めたばかりの魔法は暴走し、殺人鬼を殺すほどにまで及んだ……いや、十四は暴走を止めるつもりはなかったのだろう。家族を殺した相手だ。憎悪に体を委ねて報復したという方が自然に思えた。

「呼吸、心拍共に安定してますし、脳波に異常はありません……」

明日にでも一般病棟に移転しても大丈夫なほど……」

「……ちよっと待ってちょうだい、シャマルさん。この怪我で？どう見たって、一週間^{ICU}はここで安静にするべきと思うわよ私は」

本職の目ではないが、リンディの視点から見れば診断書の怪我の内容はそんな短時間で治るほどのものではないと即答できた。管理局の高い技術力を以てしても全治一年半がいいところ。もちろん治療後のリハビリなどを抜きにしてだ。

十四は生死の境を彷徨っていた。内臓は残らずズタズタ、無事で済んでいるのは肺と心臓くらい。骨は肋骨のほとんどが複雑骨折しており、四肢の骨もほとんど同じ。片目が完全に潰れ、血液は圧倒的に足りなく、輸血があと少し遅れていたら手遅れだった。

その状態に置かれても十四は生き延びようと驚異的な治癒力を発揮していた。

もはやそれは治癒というより再生に近い。

「私も驚いているんです。自力の魔力が足りなければ病室の魔力を収束して取り込んでいるくらいですから。このペースが進めば明日また意識は回復するでしょうし、出歩くくらいの体力も出てくるでしょう」

「そこまでの回復スピードだというの……！」

治療系の魔法は存在し、シャルも他に並ぶものはいないほどの使い手ではある。

しかしそこまでの治癒スピードは魔法で再現することはシャルでも不可能である。

無理がありすぎる。そんな都合のいいことがあるはずがない。リスクがないはずがない。専門家としてシャル、高い魔法の技量を持つリンディは同じ結論に至っていた。

「人の細胞分裂の回数は決まっているわ。このままだと彼の寿命を縮めることに……」

「止めようとしたなら、数分と経たず危篤状態に逆戻りです。私の手では、そこから容体を安定させることは不可能です」

魔力の循環を止める手段は存在する。それをしたなら確実に十四は死ぬ。こうして容体が安定していることが奇跡なのだ。

無力感を味わう者が、またここに。

誰もが、何もできないと嘆く。

渴望、籠を壊して

加添家惨殺事件から四日後。また、加添十四は目を覚ました。

ICUではなく、寝ている間に一般病棟の病室へと移されていたことは大して気に留めなかった。酸素マスクも外され、点滴も一つしかない。

掛布団をどかし、いつものように起き上がる。

痛みがない。完全に治っていた。

腕に巻いてあった包帯を解くと、傷跡は綺麗に消えていた。

あの重症が寝るだけで治った。そんなわけがない、と十四は首を横に振った。

状況を知るべく、十四は枕元のナースコールのボタンを押した。

十四はナースコールのボタンで来た医師、シャマルから大体の事情を聴き、そして己の記憶と齟齬がないかを確かめた。

家族が殺されたことは現実であること。今は事件から四日経っていること。ここが時空管理局本局という次元世界の平和を守る司法組織で、地球ではない次元の海にある場所であること。家族を殺した男は殺人鬼で、男もまた魔法使いであったことを知った。

自分が殺人鬼を殺したこと。自分もまた魔法使いの資質があったこと。自分の怪我がこんなにも早く治ったのは、無意識下で魔法を使って体を治していたということを確かめた。

知りたいことを知り、確かめたかったことを確かめられた十四は、

自分が何をするべきかをシャルに聞いた。

「俺にはもう身寄りはありませんし、国からの補助金や親の保険金だけで生活できるとは思いません」

聞く相手を間違えている、とは十四はわかっている。それでも聞かずにはいらなかった。

生活水準を変えずに生活するのは十四はもう無理と判断した。この小学生の身で独り暮らしをするのには資金的な問題が直面せざるを得ない。

さらに言えばこの治療費もある。加添家は貧乏ではないが裕福でもない。ごくごく普通の、中流家庭であった。管理局という得体の知れない所では日本の保険証が使えるとは思えなかった。

淡々と自分の今置かれた状況を述べる十四に、シャルは異常性を感じ取った。

冷静過ぎる。落ち着きすぎる。これが家族を失ったばかりの少年の顔なのか、と疑うほどであった。

シャルの周りにも、彼と同年代の子供で大人びた、できすぎたと言っているくらいの子をよく知っている。そのうちの一人は、自分を家族として受け入れてくれた敬愛すべき主である。

だが、そんな子でも最愛の家族を失った時には涙を流した。大いに悲しんだ。子供は、所詮子供であった。

しかし、十四にはそれが感じられなかった。動揺も、悲しみも、何も。ただ純粹に、これからの身の振り方を案じていた。

まるで、テレビで殺人事件が起きて赤の他人が死んでも、何も感じないように。死んだのか、と事実を受け止めるだけのように。

「ショックじゃないの？」

「ショックを受けている暇があるとは思えませんがね。敵討ちは…とつづく終わってますし、これからのことを考えていた方が有意

義です」

平静な態度は崩れていない。十四は本当に、何も感じることはなかった。

まるでロボット。まるで機械。シャルは無機質な冷たさを感じさせた。

——否、そうならざるを得なかった、という推論をシャルは立てた。

受け入れがたい現実を受け入れるには鉄の精神こころになるしかなかった。別のことを考えるしかなかった。

シャルにはそれが、何よりも痛々しく、悲しかった。

「では。偉い人に会いましょう」

淡々と、冷たく、氷のように。

当然のように、十四は点滴の針を抜き、絡みついた包帯を取り払った。

取り払った点滴の管と包帯は、彼を縛っていた冷たい鎖のようだった。

十四の身の振り方は着々と決まった。かかった時間は一週間程度。一切の傷跡を残さず完治した十四は、また再び学校に復学した。だが、通う学校は彼の通っていた市内の学校ではなく、海鳴市という彼の聞いたこともない知らない土地にある私立聖祥大付属小学校。そこからの再スタートだった。

住む場所も変わった。同じく海鳴市の高町家に、十四は居候する

ことになった。

そのことについては、高町なのはの強い希望があったことも大きな要素にある。

大きく変わった生活。変貌した環境。

魔法使いとして覚醒したと同時に、十四の目から見る世界もまた大きく変わったのだった。

十四には何かが物足りなかった。

充実した新しい生活。暖かい食事。優しい人たち。生きることには何一つ不自由していない。

そこに過不足を感じるところがあるというのか。

どこか違和感があり、どこかが欠落している。

否、欠落などない。寂しさ、孤独感もない。

空白は満たされ、埋められていた。隙間なく完全に。

そう。空白も、欠落もない。

埋められていた。残らず。凹凸なく、穴もなく、平坦な地平線。

それが、何よりも、我慢ならず、疼き、痒く、渴いた。

だから十四は動いた。

窮屈ではなかった。居心地は悪くなかった。ずっとそこに居てもいいとさえ思った。

しかし、十四はそれらを取り払った。それが自分を縛る鎖と見なして。自分を守る鳥籠を壊して。

自分にとっての渴望を、飢えを、渴きを、願いを、欲を……。十四は探すため、忽然と、前触れなく姿を消した。

それが加添家惨殺事件から一ヶ月後。高町なのはの慟哭から始まった物語である。

理由、知りたくて

加添十四が失踪したという報は、瞬く間に広がった。そして捜索隊の編成も、素早い時間で完了していた。

日本の治安維持組織、日本警察と数多の次元世界を束ねる時空管理局、二つの組織による捜索。近い場所にいるのなら警察、次元世界または海外へと発っているというのなら管理局の手による捜索ができる。

たちまち包囲網は完成し、十四の発見も時間の問題とされた。

十四の捜索を急ぐ理由。それは十四の魔法資質において問題があった。

高町なのはに劣るものの、保有魔力量はそれに迫る物を持ち、出力も高い。魔法に関しては高い能力を秘めた才能を持っていた。攻撃、防御、補助全てに万遍なく、魔導師にとって理想像と言ってもいいほどの。それこそ、成長すればなのはのレプリカのような資質の伸ばし方もできた。

しかし、いかんせん十四は魔法に目覚めたばかり。暴走する可能性は高く、もしも暴走してしまった場合街一つが消し飛ぶ危険性があった。

それをさせないためにも、一刻も早い十四の確保が重要視された。

十四失踪から二日後。九州のとある街。日に数度、日本と韓国を

往復するフェリーを使えば数時間で海外へと渡れる場所。そこに十四はいた。

旅行用のキャリーバックを引きずり、大陸へとつながる半島へと向かうフェリーに乗り込もうとしていた。

パスポートは自分用の物を持っていた。加添家が二年前、家族でハワイに行った時に取得した物である。

完全に潰れて再生のできない左目は医療用の眼帯で隠し、年端もいかない少年が一人キャリーバックを引きずって歩く様は、フェリーに乗り込む客の中で大いに目立った。

だからこそ、十四は呆気なく簡単に見つけられていた。

「見つけたよ。探したんだから、トシ」

少女が、十四に声をかける。

その声を無視をしてそのままフェリーに乗り込むための階段を上ろうとするが、列をなす周りの視線がまとわりついた。

鬱陶しく思いながらも十四は後ろの客に前を譲り、列を外れた。声をかけてきた方に目を向ける。

そこには、金髪のツインテールの少女……十四の見知った私立聖祥大付属小学校の制服を着た、見知った顔。

日本人ではないながらも、将来はとんでもない美女になることがわかりきった美少女に、十四と同じくらいに目を引いた。

「どこに行くの？黙っていくから、みんな心配してたよ」

当たり前だ、黙っていったからこそ意味があった。心配など関係ない。十四は自分のために誰にも黙ったのだ。

しかし、追ってきた少女、フェイト・テストロッサ・ハラオウンはどこかズレていた。

海鳴にいた人たちは人の言うことを信じやすい。なかでもとりわ

け、彼女は優しすぎた。十四にとってみれば、穢れの知らない純粹無垢な少女と見て取れた。

そして誰よりも、十四にとって付き合いが面倒くさかった人物だった。

十四を追って管理局が人員を編成することは十四自身も予想できたことだった。しかし、かち合うのはアースラ武装隊の誰かとは思っていた。

追手としての戦闘能力も、追ってくる者の人間性も、彼女を十四は厄介としか思えなかった。

「あっちに用事がある。用件聞きたいならあっちで聞く」

転移魔法を使えば、フェリーで隣の大陸の半島につくまでに比べればお釣りが出るほど。普通に飛行しても全く問題はない。

居場所がわかった。行先もわかっている。先回りができる。ならばここで引き止める意味も薄くなる。

「で、でも、」

「用事があると言った」

フェイトを置き去り、十四は列の最後尾に並んでフェリーに乗り込む。

しかしフェイトはよくよく考えると、その方が都合がいいと考えた。

フェリーの行先は釜山。行先はわかっている。なら、そこで捜索に関わっているのはたちを集めればいい。

フェイトは十四が釜山行のフェリーに乗っているという情報を、捜索に関わっている全員に伝えた。

追手が来る。それ自体は十四も当然の如く予想ができていた。それも魔導師……管理局の中でも戦闘のプロが集まる武装隊で構成された、暴力的というほどの戦力で構成された捜索隊が、自分を探しにくると。

自分にそうするだけの重要な価値がある。その原因が自分の内にある、魔法の才ということも十四は理解している。そして方向性を違えば、破滅的な結果に繋がることも教えられた。

しかし、十四はそんなことは知ったことではない。追ってくるなら逃げる。十四は決めた。もう変えない。変えたくない。

予想ができていた。なら予測もできていた。そして対策も立てた。失踪してから二日間、十四は移動手段を公共の交通機関のみを手段として使い、魔法という超常の力には一切頼らなかった。

魔力反応というものは、個人を特定できる。魔力の波長、特性を読み取れば一発で判別がつき、管理局という組織はその手段のスペシャリストの集まりであった。

十四は魔力の一切を殺し、電車で乗り継ぎ、ここまで来た。

海鳴市からこの港町までは真っ直ぐ行けば一日足らずで辿りつくことができる。それでも二日という日数をかけたのは、日本の警察機関による追手を警戒してのことであった。

そして最大の鬼門が、このフェリーであった。

ここで十中八九、管理局の追手に尻尾を掴まれる。渡航記録を閲覧すれば、加添十四が釜山行のフェリーに搭乗したという記録が残る。

管理局には、転移魔法がある。行先がわかっているのなら、先回りされてしまい、そこでゲームオーバーという結末に終わる。

十四が最初から空路を選ばなかった理由が、それにある。空港であるなら、尚更記録は整頓されて残るからだった。

密航という手は問題外であった。発覚したときのリスクは非常に高く、追手を増やす結果となってしまう。実行は可能ではあった。この自分には重火器では遠く及ばないほどの武力を生身で持っている。それでもいくら魔法と言う手段があろうとも、暴力的対応は論外である。本当の最終手段だった。

苦渋の二択。どちらもどうせ跡がなくなら、十四は海路を取った。海路には、空路にはないメリットがあった。

出港して一時間半。キャリアバックを引き、船内の船尾へと十四は来ていた。

柵で隔てた、船と海。見下ろすと、船が海を割って進んでいるのが海面に流れる海流が見せていた。

結構な高さだ。近くには、もしも落ちた時のためか、縄のついた浮き輪が常備されていた。

ざっと、十四は見まわす。船尾に他の乗客はいない。船員もない。それだけで十分であった。

柵に身を乗り出し、そしてそのまま何のためらいもなく頭から一直線に海へと落下した。

「オーバープロテクション
全周囲防御膜、展開」

魔力で構成された膜、防御魔法プロテクション。ミッドチルダ式の基本的な防御魔法で十四の使ったのはその応用、全身を守る球体の防御。

海中へと入る寸前、十四の展開した赤錆色の防御が海面に叩きつけられる衝撃を殺し、海水にも濡れなかった。

フェリーが去っていくのを見届けるまで一時間。ずっと、十四は海中で大人しく待っていた。

海面から顔を出し、十四はプロテクションを解いた。

そして手を拳銃の形を作り、真上へと人差し指の先を向けた。

「フオートンバレット直射型光子銃弾、シュート射出」

ハンマー撃鉄で叩くように、狙いすました照準の親指を銃身バレルに見立てた人差し指に倒した。

乾いた音が響き、指先から高速で魔力で構成された弾丸、魔力弾が放たれた。

貫通力と速度に優れた直射型魔法は、誘導性は存在しないものの、速度がかなりのため回避は困難。ましては不意を打たれ、何の躊躇いもなく放たれたそれは、弾丸の飛来先の目標物は回避する術を持たない。

「！」

『Round Shield』

フオートンバレットは発生したミッドチルダ式の魔方陣が描かれた魔力の盾によって威力が逸らされた。

魔力の光は金色。纏うバリアジャケットは黒のレオタード。手にバルディッシュした戦斧は彼女の愛機。

十四にとって、十分既知の人物であった。

「気付いてないとも思ったか、テストロッサ」

十四が見上げた場所にいたのは、先ほど港で出会った少女、フェイトであった。

格好が違うのは、彼女も魔導師で、ミッドチルダ式の魔導師の戦バリ闘アジャケットアジャケットを纏っているからである。

「トシ、すっかり落ちたんじゃ……ないんだよね」

「そういうお前こそ、あっちで待ってるんじゃないのか」

十四にとってみれば適当に取り繕った軽い嘘であったわけだが、そんなものでもフェイトの心に傷は与えられるほど彼女は純粹である。

しかし、当の彼女にはどこ吹く風。なんの堪えた様子もなかった。

「……やっぱり、黙ってどこかに行くつもりだったんだね」

フェイトを始めとした、十四の搜索に当たっている全員は、彼がちょっとした小旅行のつもりで姿を消したとは思っていなかった。そのつもりであったなら、行先を告げ、一人で行くという旨を伝えているはずであるから。

彼女にしてみれば、いきなりのことだった。唐突すぎた。悲しむことより、驚きが勝った。

理由が欲しかった。十四がいきなり姿を去ったその理由。十四の胸の内だけにある、失踪の原因。

彼のせいで、今、泣いている親友がいるのだから。

メイク・フットボール
「蹴球形成」

魔力が収束し、十四の足下に赤錆の魔力のサッカーボール大の砲弾が形成される。

それを蹴り上げ、器用にリフティングを始める。サッカー経験者であって、足、腿、肩、頭と巧みに操り、ボールと戯れる。

何も言うつもりも、何も聞くつもりもない。そういう意思表示であった。

「教えて、トシ。どうして黙って行こうとするの。どこか、行きたいところでもあるの?」

協力できることなら、フェイトは手伝うつもりであった。力になりたかった。

家族を失った十四の気持ちは、フェイトは痛いくらいに理解できていたつもりであった。フェイト自身も、母を失った身であるから、孤独に満ちた目。悲しみを帯びた目。かつての自分と同じ目を誰かが見るのはもう、嫌だったから。

ストライク
「蹴撃」

——しかし、十四の返答はフェイトへと蹴り出されたサッカーボールの砲弾であった。

先ほどのフォトンバレットより高威力ではあるが、速度は劣る。だが、フェイトは微動だにせず、砲撃は当たらず彼女の耳側を通りすぎ、彼方へと消えていく。

「本気、なんだね」

邪魔をするなら、ブッ飛ばす。それが十四の返答。

できることなら、フェイトはこのバルディッシュを構えたくなかった。事を荒立てたくなかった。

そうはいかないのなら。フェイトは力を使う。この力を、魔法の力を。

話を聞いてくれるまで、戦う。親友がかつて、自分にくれたように。

彼女もまた、そのために力を振るう——。

袂分かつ拳、言葉要らず

『Load cartridge, Haken form』
「ハーケン、セイバー！」

先制したのはフェイト。デバイスに搭載された、カートリッジシステムによって魔力を増大させた。

フェイトのデバイス、閃光の戦斧バルディッシュ・アサルトの大鎌形態ハーケンフォーム。そこから放たれた金色の鎌の刃は十四を追尾して迫る。

自動誘導系の魔法。さらに切れ味も鋭く、切断力は甘く見れない。十四は、身をもって知っている。

——だからこそ、十四は避けない。

「……！」

円形の刃をまともに受け、彼の着ていたジャージは切り裂かれる。魔力による補強なども一切していない普通の服は、非殺傷設定とはいえ簡単に散っていく。

追撃の手をフェイトは止めない。

十四との模擬戦闘を一度経験したことのあるフェイトは、十四の怖さをよくよく知っているからだ。

初っ端から全力。一切の手加減はない。

「プラズマランサー、フルブラスト……」

発射台であるプラズマスファイアを六基配置。照準は全て十四。誘導性は全て殺し、威力と速度にリソースを全て振る。

「ファイア！」

電撃の投槍。目にも止まらぬ速度で十四に殺到する六発の矢は、防御も回避も間に合わぬまま直撃する。

ハーケンセイバー、プラズマランサーを一度に食らって、大きくのけ反り吹っ飛ばされた十四。しかし、飛ばされた先には、すでに超高速で回り込んでいたフェイトがいた。

バルディッシュの形態はハーケンフォーム。その大鎌を振るい、十四を容赦なく刻んでいく。

一撃。

二撃。

三撃。

四撃。

五撃。

——六撃。

怒涛の連続攻撃から大きく打ち上げられ、十四には慣性に従って落下していく。

それでも、フェイトは手を止めない。容赦をしない。フェイト自身、こうまで徹底して攻撃することに心が痛かった。しかし、こうまでしないと十四は止まらない。止められない。

『Load cartridge』

「プラズマスマッシャー」

バルディッシュから、二つカートリッジが排出される。

左腕に発生した環状魔法陣によって砲身の役目がなされている。手のひらには魔力を極限に溜め、溜め、溜め……砲撃魔法、プラズ

マスマッシャーを放とうとしている。

泣きたい。怒りたい。フェイトは、ここまで非情に徹することができる自分が恐ろしく、そして悲しかった。

後で謝ろう。十四には、許してくれとは言わない。許してくれなくていい。

だがまずは、引きずってでも海鳴へと連れ戻す。

「ハアアッ！」

雷撃を伴う貫く魔法は、落下して海面へ叩きつけられようとしている十四を襲った。

海を割り、十四を海の奥底へと押しつぶした砲撃。巨大な水柱を立て、海は大きく波打った。

終始圧倒。フェイトは力を見せつけた。

魔法のキャリアが違い過ぎる。フェイトは幼い頃から魔法に触れており、長く連れ添った相棒もいる。一方十四は魔法に触れてまだ一ヶ月弱程度。しかも自分用のデバイスを所持していない。

単純な地力では、十四がフェイトに勝てる要素はない。まともにぶつかり合えば、十回戦って十回勝つのはフェイトの方である。

——しかし、十四は最初から、まともに戦うつもりは最初から皆無であった。

そして自分が得意とする戦い方は、明らかにまともではない。十四はそれを自覚しており、戦いにおいては手段を選ぶつもりはない。

十四が上がってこない。やりすぎた、とフェイトは顔をサツと真っ青になる。

非殺傷設定といえど、魔法は万能ではない。勢い余って大怪我をすることもある上、今の十四は海中。気絶でもしてたら、溺れてしまうに決まっている。

「トシッ！」

十四を助けるべく、フェイトも海中へと潜る。
もしも、もしも十四に何かがあったなら。
それこそ、なのはに顔向けできない。

「どこ、どこにいるの、トシ！」

バルディッシュの生体探索を全開にして、海に落ちた十四を探す。
十四を見つけるのは簡単であった。海底にて、倒れている彼がいた。

十四から微弱な魔力反応があり、体が勝手に水圧から守っていた。
フェイトは安堵する。大した怪我はなさそうで、少し経てばすぐに意識は目覚めるだろう。

海面から出ようと、十四の腕を取ろうとしたとき――。

――フェイトの首を、十四の手から繋がっていたバインドで縛っていた。

「くっ!？」

設置型のバインド。赤錆色の鎖は、間違いなく十四の物である。
対象者を縛るバインド魔法。得意とした魔導師が身近にいて、そして十四が師事した人物。

フェイトの義兄、クロノ・ハラオウン直伝の設置型捕縛鎖――。

ディレイバインド

「な……んで……」

どうして魔法が使える。あそこまで魔法を叩き込んでおきながら、

どうして意識を保っていられている。

いや、フェイトにはわかっていた。動ける理由が。十四にとってみれば、いくら魔法を食らっても、動けない理由にはならない。

「……再生……！」
リジェネレート

十四の体に刻まれた、大鎌の攻撃、射撃魔法の攻撃、砲撃魔法の攻撃、その全ての攻撃痕が目に見える速度で再生が始められている。傷跡には全て、背中に羽の生えた小さな人型をした妖精が、十四に治癒魔法を施していた。その妖精は十四の魔力光と同じく、赤錆色をしていた。

これがフェイトを始めとした、管理局の人間が十四を恐れられる理由。稀少技能^{レアスキル}、『機械仕掛けの妖精』^{メタリカ・ブラウニー}。

名前の通り、レアスキルを持つ人間は非常に少ない。そしてそれだけ、重宝される存在である。

十四の『機械仕掛けの妖精』の能力は、“生体の状態の時間操作”である。今、傷を治しているのは戦闘前の体へと時間を巻き戻している。

応用性が非常に高く、限定的とはいえ時間操作という反則的能力。十四が魔法に覚醒した時、この能力も共に目覚め、殺人鬼を返り討ちにした。

倒れても、倒れても、倒れても。傷を治して治して治して。立ち上がり続けた。

魔法を本格的に学んでからの模擬戦もそうであった。ヒットポイント制でなければ、十四は絶対に負けることはない。

どれだけ相手が格上であろうと、立ち上がる気力がある限り、十四は負けない。

現に、十四のフリースタイルの模擬戦の戦績に、敗北のカウントは一つも存在しない。

「こ……のっ……」

なんとか、このバインドの拘束を解こうとするが、構成がかなり強固にできていた。クロノに教えらえたこのバインドは、クロノ本人の物と比較しても謙遜ないほどの出来である。

十四はフェイトの髪を乱暴に掴み、仰向けに倒す。腰をどっしりと深く下ろした構えで、右手で拳を作る。

フェイトが砲撃の時にしたように、十四もまた右腕に環状の魔法陣を展開する。

空手の構え。そしてその型から、打ち出されるのは空手の技の代名詞。試し割にも使われ、生身の拳でコンクリートブロックを破碎することも可能。基本にして必殺。最強の技。

——
ファーストスマッシャー
砲撃装填型正拳！

滑車の如く左手は引き、右手は突き出す。腰と腕から繰り出した必殺の拳は、フェイトのバリアジャケットを容赦なく貫いた。

海底が割れるほどの下段突き。コースクリュー・ブローと同じように捻じりこんだ一撃は、強烈の一言に尽きる。

フェイトは、バリアジャケットの防御力を控えめに設定してある。防御を軽くすることで、自身の移動速度の高速化を図っている。

逆に言えば、速度のために防御力を犠牲をしている。

そこに何もかもを詰め込んだ一撃を当てれば、一撃で落ちる。当然の理屈であった。

それを知っている十四は、これ以上フェイトが戦えないことを察していた。

「……」

勝者となった十四は、砲撃を撃った自分の拳を見た。

骨折していた。皮膚から折れて尖った骨が突き出て、鋭い痛みを
発している。

下段突きが当たる直前、バルディッシュは出力を全開にして防御
に徹した。

その防御は突破されはしたが、一矢報いて十四の拳を壊した。

『機械仕掛けの妖精』が拳の再生をしている。痛みが徐々に埋め
られていくこの感覚は、少し心地よいものであった。

ふと、十四は自分の口元が釣りあがっていることに気付いた。そ
う、笑っているのだった。

何故、自分が笑っている？何か、嬉しいことでも起きたのか。そ
れとも、今楽しいのか。

——ああ、わかった。そういうことだ。

これこそ、求めていた渴望。自分の生きる理由。

「おい、バルディッシュ。伝言だ」

見つけた。見つけてくれた。フェイトが身を挺して教えてくれた。
生きる理由。そして、これからの身の振り方を。

ああ、感謝しなければ。本当に、彼女らには世話になりっぱなし
だ。恩を数えたらキリがない。

ならば言わなくては。彼女らにも。

十四は、喜びに打ち震えながらもバルディッシュへ向けて……そ
して、自分を追う者たちへとメッセージを託す。

——この行動こそ、十四の運命の岐路を選択した瞬間であった。

所望、敵となれ

「フェイトちゃん！」

波間に浮かぶ金髪の少女を高町なのはは見つけた。

フェイトが加添十四に接触、戦闘となったと聞き、なのはは飛んでここまで来た。

どうして唐突に姿を消したのか。どうして理由を教えてくださいなのか。

話がしたかった。面と向かって、話を聞きたかった。

なのはの望みはたったそれだけ。たった、それだけだというのに……。

彼女の黒衣のバリアジャケットはボロボロ。バルディッシュは待機形態で手で握らせて胸に置いてあった。

十四はいない。すでもう、去った後だ。

そして目を引いたのは、彼女には赤錆色の羽の生えた小人……『
機械仕掛けの妖精』^{ブラウニー}が取りついていたことだった。

「ブラウニー……？」

見覚えのある、魔力で象った妖精。それは間違いなく、十四のレアスキルによって作り出されたものであった。

それがフェイトに取りつき、怪我の治療を行っている。『^{メタリ}機械仕掛けの妖精』は使用者だけでなく対象を定めれば、生物であるならば誰にでも施せる。しかも多少の自立行動を可能とし、簡単な命令を下すこともできる。

再生が完了したのか、役目を終えた『機械仕掛けの妖精』は魔力素となって散っていく。

「んっ……」

「フェイトちゃん、大丈夫!？」

「なの、は……」

意識を取り戻したフェイトは、外傷の一つもなかった。

戦闘前の状態へと再生をした現在の体調に、問題は一切ない。このままバリアジャケットの再構成をして、飛行することくらい問題なくできる。

「ごめん、なのは。トシを、止められなかった」

フェイトは、謝らなければならなかった。十四を前にして、止めることができなかった。

知っていた。フェイトは、なのはが十四に対して罪悪感を抱いていたことを知っていた。

なのはは十四の力になりたがっていた。それはなのは自身の自己満足による償いに過ぎない。しかしそれで彼女自身の心が癒えるというのならフェイトは止めなかった。

不甲斐なく、フェイトは十四を取り逃がしてしまった。模擬戦で戦ったことのある相手であり、手の内をお互い知っている相手だというのに。

「大丈夫だよフェイトちゃん。今度は、一緒だから」

「なのは……」

大丈夫、と言ってもフェイトはその言葉を鵜呑みにしない。なのはの大丈夫は、信用できないものであるから。

必ずどこかで無理をしている。それは一目瞭然であつた。

「一旦、戻ろう。十四くんなら、すぐ見つかるよ」

——笑いかけてくるこの顔の裏に、なのははどれだけ悲しんでいるか……。

（それを、わかってあげてよ、トシ……）

テストロッサ家の住むアパートでは、作戦会議が行われ、主要メンバーが全員集められていた。

高町なのは、フェイト・テストロッサ・ハラウン、八神はやて、クロノ・ハラウン。

八神はやてを守護するヴォルケンリッター、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。

フェイトの使い魔であるアルフト、なのはの魔法の師であるユーノ・スクライア。

アースラ艦長リンディ・ハラウンとオペレーターエイミィ・リミエッタ。

以上のメンバーが集まり、対策会議を行われていた。

「フェイト、大丈夫？ 顔色あんまり良くないよ」

「大丈夫だよ、アルフト。十四が治療してくれたから、怪我は何もないよ」

体には異常はない。十四の『機械仕掛けの妖精』は戦闘前の状態

に巻き戻したただけで、他に何もしていない。

不調に見えたのは、フェイトの心が原因だった。

「フェイト。十四を逃がしてしまったのは君の責ではない。この場にいる誰が対応したとしても、一人では彼を捕まえることはできなかっただろう」

クロノの言葉は十四をそれだけ高く評価していることを表していた。

決して、自分たちを過小評価しているわけではない。この、自分たちの戦力は管理局内にも比肩するモノがないくらいの大規模戦力である。

ミッドチルダ式から古代ベルカ式の魔法のエキスパートたちが結集したこの集団は、打ち崩されることは滅多にない……いや、あつてはならない。クロノはそう考えていた。

だが、十四はそれを出来る可能性と能力を持った男である、とクロノは確信していた。

「ちょっと待ってくださいよ。アイツは高々魔法を覚えて一月程度のヤツじゃねーですか。そりゃ、滅多にないレアスキルを持ってるとはいえ……」

守護騎士の一人、ヴィータがたどたどしい敬語でクロノに意見する。

「もっともな意見だ。確かに、魔法については高い才能を持つてるとはいえ、十四はまだまだ未熟だ。デバイスも持っていない。魔法を教えていた僕が断言する」

「じゃあ……」

「ではなぜ、彼はフェイトから逃げられた？」

高機動戦闘を得意とするフェイトから逃げられるほど、十四はそんなに速くない。それどころか、この面子の中でもフェイトで速さに勝てる者はいない。

戦闘になったとして、彼がフェイトに勝てる確率など万に一つはない。それだけの実力差があったということだ。

だからこそ、十四は騙し討ちをフェイトにした。避けられた攻撃を受け、防げた攻撃を受け、なすがまま海底に沈み、フェイトをおびき寄せていた。

勝てぬなら勝てる方法を使う。当然の選択である。たとえそれが、相手の善意に付け込んだ術であってもだ。

「『機械仕掛けの妖精』によって、考えられないほどのタフネスを持っているんだ。それこそブラウニーを出せるほどの魔力があれば、無限に立ち上げれる」

それは誰もが模擬戦で経験しているじゃないか、とクロノは続けた。

十四は模擬戦で負けたことは一度もない。彼自身、負けず嫌いな性格もあってか、敗北のカウントを付けることは許したくなかった。対戦相手の魔力切れ。その結果で、十四が勝利した内容と、時間制限の関係もあって引き分けがほとんどという結果になっていた。

「狙うなら、十四くんの魔力切れ」

十四の戦術は必要以上に魔力を節約するような戦い方であった。魔力消費の少ないブラウニーで回復に努めつつ、攻撃のチャンスになったら一撃で仕留める。そこから十四が魔力を使いたがらない戦い方をしたがるのがわかってくる。

それだけ、魔力切れによるブラウニーの使用不可を恐れている。

魔法技術の拙さをレアスキルで補っている戦い方をしていた。

「攻略方法が見つかったんなら、それなら」

「いや、攻略法ならもう一つある」

魔力切れ以外に、クロノが提示する攻略法は、ポケットから取り出した一枚の白いカードにあった。

氷結の杖、デュランダル。その、待機形態であった。

「これで、十四を一旦封印して、こちらで解放する。これが一番手っ取り早く確実な手段だ」

「よ、容赦ないなあ、クロノ君。それ本気かい」

「本気だ。正直僕は、彼を闇の書の防衛プログラムレベルの危険要素とも考えている」

「そ、それはさすがに言い過ぎちゃう？」

闇の書の防衛プログラム、とまで評価にはやては戸惑う。かつて深く事情に関わっていた彼女だからこそ、その評価は些か冗談がきつすぎた。

存在するだけで世界を壊しかねない。そんなレベルの相手とまで十四は判断されてしまっている。

「アハハ。クロノ君、可愛い義妹^{フェイト}を傷つけたのが自分の弟子だからムキになってるんじゃない？」

「うるさいぞエイミー。まあ、それだけの警戒心を持っていれば危うからずということだ」

相手は魔法を使い始めて一月の素人と思ってはならない、というクロノの発破。一人前の、恐るべき脅威を持った相手だということを肝に命じろという、クロノなりの呼びかけである。

「……では、フェイト」

「はい」

フェイトは、バルディッシュを取り出してデータ内部に保存してある映像データを再生する。

十四が残した、このメンバー全員へと宛てたメッセージ。それには、十四が失踪をした理由が、十四自身の口から聞くことができる。

——映像が再生され、表示されたのは十四の顔。

その顔は、多少の笑みを湛えていた。

『——加添十四だ。いきなり消えたことには……まあ、悪いとは思ってる。それは許せ』

映像に映っていた十四はいつになく饒舌で、嬉しそう。そして一切、やったことに関して自分が悪いとは思っていないと言葉の口調からわかる。

『俺が出て行った理由は、なんてことない単純なものだ。……我慢ならなくなった、それだけだ』

我慢？十四は、何を我慢していた？

自分たちの知らぬところで、我々は彼に何を強いていた？

『寂しさはない。飯は美味しい。学校にも通って、魔法なんて面白おかしい代物の扱い方も教えてくれた。これだけのしてくれたことに、恩を感じてるし感謝している』

嘘は言っていない。十四は、本当にそう言っている。

なのはたちと共に、学校に通って、魔法の訓練をして、なのはに

としては家族のように接した。そしてそれが、十四にとって幸せだった。

『……だが、な。気付いちまったんだよ。何もかも与えられて、お前はそれで満足なのかってさ』

巢にいる雛鳥が親鳥からエサを与えられるように。何もしていないのに、ただ与えられて。

……気付けば、十四には欲望というものがなかった。幸せという微睡に漂い続けて、いつかは腐り落ちていく。そういう存在に成り下がっていないかと。

欲望は生きる活力。渴望は潤いを求める源。そういう物が、なにもかも、十四には欠落していた。

生きながら死んでいるなど、十四には我慢できなかった。

叶えるまで死んでたまるかという欲望を、十四は持ちたかった。

『見つけたかったんだ。俺の欲を。渴望を。飢えを』

金でもいい。名誉でもいい。女でもいい。俗物的な物でいい。生きたいという衝動が、欲しかった。

欲望を見つけないという欲望。それが十四を海鳴市から姿を消した、衝動であった。

『けどま、案外早く見つかったよ。テストロッサ、お前が教えてくれたんだ』

「私が……？」

『お前と戦って、ぶちのめした。そんな時わかったんだ』

フェイトと戦い、そして気付くことができた。十四の欲望。十四の望む、これからの。

『俺は、悪^{ワル}になりたがってる』

「悪……に？」

『親しかったヤツをぶちのめして笑ってんだ。悪以外に言うことはない』

ニカニカ笑いながら、十四は自分の欲望を語る。

戦って、勝って嬉しいとか、そういう類の笑みではない。どうしようもない、ろくでなしの、悪の笑み。

『だからさ。これは俺の最後の我儘だ——』

——悪に対する正義のように、俺の敵となってくれ。

懇願するように、祈るように、告げられた言葉は宣戦布告だった。

「戦おうぜ、正義の味方ども」

同時刻、妖精^{ブラウニー}たちを付き従えて十四は知らぬ山間を歩く。空気の薄い、標高五千メートルの異郷を、平気な顔をして。

彼の背後には、彼を追い、捕まえようとしたアースラ武装隊の面々が倒れ伏せていた。

——ああ、楽しみだ。楽しみすぎて、涙がでそうだ。

妖精、さらわれた者

加添十四からの宣戦布告から翌日。チベット山地にてアースラ武装隊が十四と交戦の末全滅している報を、高町なのはが聞いて一時間経過していた。

高町家のなのはの自室にて、レイジングハートから発せられた通信で、クロノから聞かされた。フェイト、はやてや守護騎士の全員も耳に入っている。

自分の欲望を知りたい。生きる理由を知りたい。幸せのまま腐り落ちる前に、生きて叶えたい望みを果たしたい。それが消えた理由だった。

そしてほどなく十四は欲を知る。悪になりたい。敵になりたい。それが希望。それが望み。それが渴望。それが欲望。

高町なのはは悩んだ。あの十四が、どうして自分たちの敵になりたいと言ったのか、わからなかった。

一緒に、高町の家で暮らして、家族として接して、寂しさを埋めた。楽しかったはずだ。幸せだったはずだ。

……それなのに、十四は敵になりたいと言った。

「わかんない。わかんないよ、十四くん……………」

どうして、その結論に至ったのか。どうして、その欲望に素直になれるのか。何一つとして、十四をなのはは理解できなかった。

悪になりたい、敵になりたい、などという願いを言った者はなのはは知らない。

叶えるのは簡単である。文字通り、敵になればいい。容赦なく、躊躇いなく、十四を倒す、機械へと変わればいい。

しかしそれでは誰も救われない。十四も、そして誰よりものは自身が。

「憎まれてもよかった。恨んでくれてもよかった。だけど……」

ただ敵であってくれ、という願いはあまりにも残酷すぎた。言葉に人の温もりが、一切感じられないのだ。

憎悪に焼かれたかった。それが十四の気持ちであるなら。

怨恨で呪われたかった。それが十四の本心であるなら。

ただ、敵であれ。それは何よりも残酷で、無味無臭で、何の心がない。あるのはただ、鉄の冷たさのみ。

命令を下された兵士のように、敵兵を撃ち殺せ。無慈悲で、情けない願いは、なのはの心を深く抉った。

なのはと十四の間にあるのは、感情ではない。立場の違いによる敵意しかない。

信じる神が違うから。肌の色が違うから。国が違うから。資源があるから。そういう理由で戦争をするのと、全く同じ。

「こんなのって、あんまりだよ……!」

十四は、なのはたちを間違いなく敵と認識する。そして彼を追う者たちは、十四を敵と認識せざるを得なくなるだろう。本気で殺しにかかるであろうから。

涙を零す。それをすぐに袖で拭くが、涙が止まることはない。ポロポロと、床へと雫が落ちていく。

力になりたい。なのはは誓った。あの光景を、加添の家の殺人現場を目に焼き付けた瞬間から、十四への贖罪が始まっていた。

それでも十四の願いを叶えるには、なのははあまりにも優しすぎた。

「武装隊には、全員ブラウニーが付いていたそうだな？」

「うん、間違いないよ。発見したときには、治療が完了していたよ」
「……相変わらず反則クラスのレアスキルだ」

アースラブリッジにて、クロノとエイミィは十四の手によって全滅したアースラの武装隊の一人一人の状態が記されたカルテを見ていた。

全員、気絶していたものの怪我の一つも確認されていなかった。
十四の魔法の師であるクロノは、実戦を重ねていくうちに着実に実力を高めていることを確信していた。

稀少技能『機械仕掛けの妖精』メタリカ・ブラウニー
レアスキルによる、再生能力を駆使した戦闘能力。管理局の指折りの武装隊であるアースラの人員を、こうまで退けられるほど、十四は使い方を熟知してきていると考えていた。
フェイト、そして武装隊には妖精ブラウニーがついていた。情けのつもりか、もしくはもう一度かかって来いという余裕なのか。

そしてクロノは、このまま十四を一人にさせておくわけにはいかなかった。

「クソッ、僕が師匠をやっていたというのに……なんて失態だザマ」

十四の魔法の師を名乗り上げたのは、他でもないクロノだ。他にもなのはとフェイトが名乗り上げていたが、あの極端に方向性が尖っている二人に十四の訓練を担当すれば、師と同じ性格の魔導師になるのは予想できていた。

折角の万能方向に成長できる魔法の才を持った逸材。ならば、同じくらいオールラウンダーに長けた魔導師に教育を施せばいい。引

き出しは多く、手広く。どのような方向性に進むかは、十四自身が決めるべきだと。

クロノ自身、弟子という物に興味がなかったわけではない。自分の魔法を教えてくれた使い魔^{リリーゼ}の猫の姉妹は、才能に乏しかった自分を鍛えてくれた。

なら今度は、自分が弟子を取ってみようと思った。

これからはもう、自分が現場に出ることが少なくなっていくだろう。執務官として魔法を行使する立場ではなく、後方で指揮を執ることが多くなっていくだろう。

どうせなら、自分が使っていた魔法を誰かに残したい。そんな願いから、クロノは十四に魔法を教えた。それがもし役立ってくれるなら、クロノにとって嬉しいことであった。

……だが、まさか敵対者となるなど、その時は思いもしなかった。

「そんなに気に病まないの。魔法なんて、使う人によって使い方も違うんだから」

責任感の強いクロノの扱い方に慣れているエイミィは彼を慰める。

「どうせならさ、思い切って無視したりとかしない？ ほら、十四くんから仕掛けてるわけじゃないし、治療もしてくれてるし、このまま小旅行みたいな扱いにすれば……」

エイミィの提案は、十四を敵と見ないことであった。現在、十四による被害はゼロに近い。追手である魔導師の一切を迎撃しておきながら、医療施設の一切を使わずに治療を行った。ならば、敵と見なさいことも手ではないのか。

少し放っておいて、頭を冷やしておけば勝手に帰ってくる。そう考えたのだ。

彼の家は、もう既にこの海鳴にあるのだから。帰ってくる場所は、

そこにしかないのだ。

「僕もそう考えたさ。所詮は子供の我儘、無視するのが上策。当たり前への対応だ」

「だったら……」

「けどそういうわけにもいかないんだ」

クロノが取り出したのは、紙媒体の資料。それをエイミィに渡した。

「な、何、これ？」

「十四のレアスキル申請書だ」

「えっ！？ま、まだ出してなかったの？」

さすがのエイミィも、これには驚いた。

レアスキルは、文字通り貴重な代物で保有している魔導師はほとんどいない。

レアスキルを持っている魔導師は、スキルの内容によるが重用され、管理局から特例措置を受けることができ、具体的には稀少技能秘匿や、出世の早さなどが挙げられる。

仕事にはとことん誠実なクロノが、そんな大事なモノを未だに提出していなかったことに、エイミィはただ事ではないと感じていた。

「これって、結構マズイんじゃないの……？」

「問題ない。所詮、局員になったときに必要であれば出しておけ、という代物だ。提出しておいた方のメリットが大きいだけさ」

あった方が便利ではあるが、なくても不自由はしない類の代物である、とクロノは言う。自己申告の物なので、そこは本人の希望となる。

十四は局員ではない。だが、データがあつたときには便利だから、十四はクロノには提出していた。

しかし、あえてクロノは本局には提出していない。
提出するわけには、いかなかった。

「どうして、出さなかったの？」

「エイミィ、君は『機械仕掛けの妖精』がどんな代物かどうか、説明できるか？」

「……えっと、再生能力だね。少ない魔力で治療魔法と同じ効果が得られているし、そのおかげで凄い打たれ強い」

「全く違う」

エイミィの答えをクロノはバツサリ切り捨てた。その非情さによよとエイミィは項垂れたが、クロノは無視をする。

「実戦で使える能力が再生能力しかないだけで、アレはかなり危険な代物なんだ」

「んー。危険というより、優しい能力だと思うよ。妖精が傷を治すなんて、実際かなりファンタジックだし」

魔法という存在は、ファンタジーというよりSFな存在である。サイエンス・フィクション

プログラムと式を入力し、そして行使する。そういう代物である。

それに比べて十四の『機械仕掛けの妖精』は名前に反してとても幻想的で、とても優しい。エイミィの言うように、それはとても優しい能力なのだろう。

そう思わざるを得ない。何せ、十四は人前では再生能力しか使っていない。だからこそ、優しい印象を与えていたのだろう。

だが、クロノは首を振る。実際、そういう代物ではないと否定した。

実際にはもっと残酷で、もっと悲しい能力ということ。

「君はこの地球に伝わる妖精ブラウニーの伝説を聞いたことがあるか？」

その質問にエイミィは横に首を振る。

「僕も、十四から聞かされた物だがな」

と、クロノは話し始める。話の内容は坦々として簡潔にまとめられていた。

ブラウニーの伝説に、『チエンジリング取り替え子』という物がある。それは妖精が人間の赤子を、そっくりそのまま替玉の妖精と入れ替えることを言うものだった。

取り替えられた人間の子供は、そのまま妖精の世界で永遠の命を得て、幸せに暮らすという。代わりに取り替えられた妖精は、短命ですぐ死んでしまったという。

出生率が高くなかった昔の時代、死んでしまった子供が幸せであって欲しいという願いから生まれた伝説。心の安らぎを求めて、この伝説に縋ったのだ。

「……ちょっと待って、クロノ君。それって、結局」

「合致していないか？十四の状況に」

「……………あ」

エイミィは気付いた。クロノが言いたいことに。何を伝えたいということ。

十四は現実の世界から、魔法の世界からやってきた殺人鬼によって、レアスキルと魔法に目覚めて、魔法の世界に関わることになった。それを伝説に当てはめるなら。

魔法を使える殺人鬼によって家族が殺され／ようせいによってとりかえられ、魔法とレアスキルに目覚めて／えいえんのいのちをて

にいれ、魔法世界に触れることになった／ようせいのせかいでしあわせにくらした。

物の見事に当て嵌りまくりだった。偶然、ではないのか？とエイミィは疑ったが。

レアスキルの名称を決定たのは他でもない十四だ。そういう皮肉を込めたというのなら。

「そう、考えて十四は名前を決めたの？」

「正直、名前はいつでもいいんだ」

大切な部分は、ここからだから。

「十四の場合、伝説のままなんだ。生きる世界が取り替えられたことも、幸せに暮らしていたということも、………永遠の命を得たということも」

ここからが、クロノの話すことの肝要な部分であった。

『機械仕掛けの妖精』の能力は、生体の状態の時間操作。それは、生き物であるならばあらゆる物の時間を操ることができるという物であった。

そしていつも十四が戦闘中に使っている再生能力。その本当の真価が、ここで語られた。

「エイミィ。例えばが、ここに余命幾ばくもない人間がいたとする。不治の病だ。医者では手を付けられず、どうしようもない。……さて、十四なら助けられるか？」

「……そんな質問をされたって、そりゃ無理って答えたいけど……できるんでしょ？」

「その通りだ。十四は治すことができる」

時間操作で健康な体であった頃まで再生し、病気そのものをなかったことにする。『機械仕掛けの妖精^{ブラウニー}』で生きているなら死期すら引き延ばすことができる。

「じゃあ、またその人間がまた死にそうな状態になったとする。そして、また治した十四に頼るだろう」

「……ん？」

「また死期が近づいたら、また十四へ。死期が近づいたら十四へ。それを何度でも、何度でも、何度でも、何度でも繰り返す」

「……えっ、ちょ、ちょっと待ってよ。それってもしかしくても……」

「そう、無限ループになってしまってるんだ。十四が治療を施し続ける限り、永遠に生きながらえることができる」

これこそ、永遠の命と言わずなんと言う。何気なく見せてきた再生能力が、長年人間の夢とされた不老不死を再現することができるのだ。

それを聞いたエイミィは、絶句し、目を見開く。そして、悟らずにはいられなかった。

——これを聞いた瞬間、自分も共犯者であることを。

「それじゃあ……黙っているしかないわけだ」

報告しなかったのは、クロノの英断だったとエイミィは心底思った。そんなことを管理局に報告したら、十四がこれからどんな目に遭うかどうかなど、容易に想像できた。

長生きしたい。ずっと生きていたい。それは人間の持つ原初の欲望。

死を恐れる人間が、誰もが、確実に襲いくる死から逃れるために不死を願った。時の支配者が、権力者が、王が、富裕者が、誰もが

追い求めた。

そしてそれを、可能とした人間が現れた。

欲に塗れた大人たちが、老人たちが、生きようと、利用しようと、汚い手で十四を求めようとするだろう。長生きしたい、死にたくない、病気を治したい、若さを保ちたい、欲望の種は数限りない。

そしてまた皮肉な話、欲望を求めた十四が、そのまま欲望の対象とされてしまう。なんと虚しく、なんと悲しい話であるか。

「このことを知っているのは、僕と母さん、十四の医務担当をしていたシャマル、そして君だエイミィ。決してこのことは他言しない……誓ってくれるか？」

能力の全貌を知っているのは、今この四人のみ。共犯者の数は、少ない方がいい。

クロノから出された、口頭での誓約。そこに何も拘束力はないものの、彼らにとって何よりも縛る物である。

言葉だからこそ、嘘は通用しない。そして覚悟をうかがい知れる。書面だけの約束などと比べたら、字など嘘にまみれている。

「当たり前だよ。何年付き合っていると思っているの」

——誓いはここに。嘘なき約束は、ここで結ばれた。

月光が薄暗く輝く海鳴市の市街地の、とあるビルの屋上。
十四は海外からまた再び、舞い戻って来てきた。

「今度は、こっちの攻撃だ」^{ターン}

ニヤリと歪めた口元は、夜空に浮かぶ三日月より鋭く、綺麗な形をしていた――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3259ba/>

悪になりたがりの再生者

2012年1月13日14時50分発行